AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2013.03) 平成23年度:151.

終末期にあるがん患者への栄養状態アセスメントの視点と介入時期

鈴木笑子

終末期にあるがん患者への栄養状態アセスメントの視点と介入時期

旭川医科大学病院　看護部　　鈴木　笑子

【研究目的】

患者の苦痛を予防するための体調管理として、食事に留まらない栄養状態アセスメントの視点の検討が必要と考えた。これまでのところ終末期の栄養状態アセスメントの視点と時期は充分明らかにされていない。がん悪液質症候群など体内環境が変わりやすい状況を適切にアセスメントすることは、新たな健康問題の出現を予防できると考える。

【方法】

事例研究。データ収集方法はカルテより情報を収集し、客観的情報とした。研究者自身が看護実践を通した半構成的面接法を用いて実施、主観的情報とした。両者の情報を意味が損なわれないように抽出・コード化、統合した。期間は 2009 年 2 月。倫理的配慮は病棟看護管理者に助言を得て、研究協力者への紹介を依頼し、患者・家族へ説明用紙を用いて自由参加、匿名性と守秘義務を説明し了解を得た。本研究は旭川医科大学倫理委員会・協力病院倫理委員会の承認を得た。

【結果】

研究協力者は 50 代～ 70 代の男性 3 名で、骨転移があり、下肢麻痺や腰痛のため臥床していた。客観的情報をコード化した結果、15 カテゴリー、36 サブカテゴリーが得られた。主観的情報をコード化した結果、14 カテゴリー、61 サブカテゴリーが得られた。

【考察】

終末期における栄養状態アセスメントの視点を考えた時、今回明らかになった主観・客観的情報のカテゴリーの関連を検討し、変化を捉える視点、生活の視点、症状緩和の視点、治療の視点の４つの視点を得た。４つの視点は各々に影響しており、関連していると考えた。アセスメントの時期として、入院時とイベント時（発熱や症状の変化）に、また 1 週間の食事摂取量が以前よりも減少している時が有効であると考えられた。

【結論】

終末期にある人の栄養状態アセスメントの視点には 4 つの視点があり、入院時、イベント時、食事量が 1 週間継続した時に介入することが効果的ではないかという示唆を得られた。